

# 翻訳プロジェクトについて

鴻 英良

古代ギリシアから現代まで、演劇に関するテキストは、戯曲やその上演された状況、あるいはそれに関する批評にいたるまで無数の数のものが翻訳されている。つい最近、完結を迎えることになった岩波書店の『ギリシア喜劇全集』（全9巻+別巻）には、クラティノスとかエウプーロスとかいった一般にはあまり知られていない古代ギリシアの喜劇作家たちの散逸した膨大な戯曲のなかの、幸運にも残された断片さえもが翻訳されていて、それらを取りあえず読むことなしに、アリストパネスをギリシア社会との関係において深く読み解くことはできないと言われるほどに、われわれの前には日本語に訳された外国の演劇に関するあまりにも多くのテキストが横たわっている。世界の、あるいは日本の演劇について考えようとするものにとって、こうした膨大な資料を読み直していかなければならないのはあきらかなのであって、演劇批評、あるいは演劇研究に携わろうとする者にとっての領野は広大である。

だが、こうした膨大な資料を前に呆然としながらも、しかし、一方において、さまざまな場所で言及されながらも日本語では読むことのできない、いまだ邦訳されていない多くの重要な資料があることを認識せざるをえないのである。なぜこうした文献がいまだ未邦訳のままであるのか、その理由を特定することは簡単ではないが、しかし、少なくとも現代演劇を考えようとするときに当然のように参照されるべきでありながら日本語で読めないものがたくさんあるということは嘆かわしいことである。

われわれはこれをひとつの欠落と考えているが、そうした欠落は奇妙なことに、ある時代にたいする近現代の日本文化の外の文化に対する関心のあり方と関係しているのではないかとさえ思われるのである。その意味について特定することもまた容易ではないが、われわれは幾つかの疑問からこの翻訳プロジェクトを立ち上げていったのである。

アッピアやクレイグなど、これほど頻繁にさまざまな場所に登場する演劇人のテキストがなぜ日本語に翻訳されていないのであろうか、あるいは、ブラムやイワノフの活動など、現代演劇の展開にとってこれほど重要視されている演劇的な事象に関わる文献がなぜわれわれにはなかなか手の届かないところにあるのだろうか。こうした問題に対して、われわれ演劇研究、あるいは演劇批評に携わるものたちは何をすることができるのだろうか。こうした自らへの問いかけとともに、この翻訳プロジェクトは始まったのである。

このように考えたとき、幾つかの欠落があることは直ちに明らかとなった。それは我々自身が知りたかったことだが、世紀末のヨーロッパ演劇は何を実践していたのかということであった（その直後に跳梁する、ドイツ表現主義、ダダ・シュルレアリス

ム、未来派、ロシア・アヴァンギャルドなどの演劇文献の邦訳の数を思い浮かべてみよう！)。

もちろん、中世のヨーロッパの演劇（民衆演劇や神秘劇）、つまり、近代演劇以前のヨーロッパ演劇、あるいは、現代のアジア・アフリカ・南アメリカの演劇などについてもわれわれはあまりにも知らなすぎる。植民地における近代化とその地域の独立は演劇という行為とどのようなつながりを持った文化をつくりだしていったのか、それはわれわれにとってもきわめて興味深いテーマであるが、そうしたことを考えるには、そうした地域での実態に関するわれわれの知識はあまりにも乏しい。

たとえば、サバルタン研究と現代インド演劇のフェミニズム的思考との関係はどうなっているのかというような問題系は、そもそも日本の演劇ファンにはまったくといっていいほど無関係なものなのである。つまり、現代アジア演劇というならば、インドに限らず、まずは、そこでどのような演劇が上演され、それがどのような社会的な環境の中で行われ、それがどのような言説を生んでいるのか、それが演劇的な実践とどのようにかかわっているのか、そうしたことをわれわれは知らなければならないのである。

つまり、欠落は無数にあるのである。

とはいえ、われわれの力量から考えて、こうしたことすべてに一度に取り掛かることはできない。それゆえ、われわれは、現代演劇の台頭にとって直接的に大きな意味を持っているにもかかわらず、あまり紹介もされてこなかった、世紀末から二十世紀初頭のヨーロッパに起こった新しい演劇の流れがどのようなものであったのか、そうした新たな潮流がどのような芸術的な思索と関わっていたのか、それが何をもたらしたのかなどを探るために、とりあえず、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語で書かれたその当時の演劇論や劇評、あるいは演劇理念を提示する膨大な未邦訳文献の、ささやかながらその一部を翻訳することにした。

スペイン、イタリア、北欧、東欧の諸言語などの文献までには今回は届かなかったが（これらの言語で書かれた文献の邦訳をもちろんわれわれはこれから提示していきたいと思っている）、この時代のヨーロッパは現代演劇の台頭期であったばかりではなく、しかも、その当時、演劇は、民族精神の高揚を褒め称えつつも民族国家に必ずしも閉ざされることなく、国境を越えて影響しあうという、逆説的なかたちで一種の文化的な共振状態のなかにあり、政治的には民族国家を強化しようという動きに抗するかのよう、横断的な芸術運動としての新たな興隆を示していたのだということが、われわれの翻訳の作業から浮かび上がってきたのであった。

\*

われわれの翻訳プロジェクトは、こうした翻訳テキストを、演劇や文化に関心を示す多くの人々に送り届けることをとりあえずの目的として始まったのだが、このような企てを実現するためには現実には何を翻訳すべきかといった討議も必要となり、あるいはその後の翻訳の作業のためにわれわれは幾度も打ち合わせの機会を持つことに

なった。そうした経緯の中で、この翻訳プロジェクトは、啓蒙的というよりは、むしろ研究会的な様相を示していったのだが、そうした経緯こそ、ここで読者の皆さま方へと送り届けることのできた翻訳テキストの意味そのものではないかとわれわれは考えるのである。

\*

このプロジェクトは、こうした文献の翻訳をさらに充実させていくという方向で進んでいる。世紀末から二十世紀初頭の演劇活動については、邦訳すべき文献がまだまだあるからである。その作業を充実させるためには、少なくともさらに幾つかの文献の邦訳が加えられなければならない。そうした作業とともに、われわれは、別の時代に（たとえば1930-40年代に、あるいは中世ヨーロッパの演劇に）、さらに別の地域に（中南米やアジア、アフリカに）この翻訳の作業を広げていくつもりである。こうした作業とともに、演劇研究の高度化をめざすこと、それがわれわれの課題でもある。